

卒業論文題目「京都所司代の政治的機能とその変遷——所司代就任儀礼をとおして——」

人文学部 歴史学分野 日本史コース 吉澤せり子

京都所司代は、朝廷や西国大名の監察、京都諸役人の統轄にあたった京都・西国支配の要となる重職である。所司代の機能は近世を通して変遷しているとされ、近年では幕府から所司代へ宛てた発給文書に注目する研究が進められてきた。一方、所司代の就任儀礼に関しては十分な研究がなされていない。二木謙一氏は、儀礼という観点から江戸幕府の構造・性格を読み解く重要性を示している。そこで本稿では『江戸幕府日記』『徳川実紀』『寛政重修諸家譜』『所司代日記』等を用いて、所司代の選任過程、就任時の儀礼に着目しながら京都所司代の機能や幕府の支配構造とその変遷について考察する。

第一章では、所司代の選任過程から、江戸時代前半に「個人才量」に重点を置かれていた所司代の「官僚化」が進み、十七世紀後半にかけて所司代の昇進コースが確立したことが分かった。

第二章では、第一章にて明らかになった所司代の「官僚化」が所司代就任儀礼における「簡略化」「統一化」という形で表れており、今後数十年に亘り存続する幕府制度の基盤ができたことが分かった。加えて、所司代の就任儀礼が朝幕間の交渉という政治目的で利用されていた例を確認できた。

第三章では、上京時の所司代は將軍の「御使」と老中支配を受ける「一役人」という両面性を兼ねており、その中で老中が所司代に同伴して上京するという慣習は幕府の支配構造を朝廷に示す機能があったと窺えた。また、江戸城内での儀礼行事は、在府期間の少ない所司代が幕府の支配機構においてどのような置つけであるかを諸役人に再認識させる貴重な機会であったと考えた。

京都所司代の政治的機能とその変遷は、所司代の就任儀礼にも表れていたことを明らかにできた。また、所司代をめぐる儀礼は各時代における所司代のあり方だけではなく、幕府の支配制度や朝幕関係を視覚化する、政治的意義の深いものであったと結論付ける。